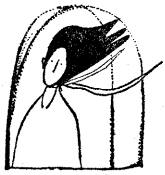
その折々に

早川　満寿子



この小さな幼稚園の庭には、有難いことに四季折々に何かの花が咲いている。始めは教材にと植えたもの、卒園の記念にと植えたもの、わずか一輪だった花が地面一杯に広がって咲いているもの等。そして今は、好きな花や樹が沢山増えてしまったというところだ。二十年前の開園当初は、背丈程の柳とポプラ、ぎんべらくらいが、風にさやさやとなびく庭だった。小さい花壇には、三色すみれとベゴニヤがやっと植えられていたが、それでも殺風景な庭には、この小さい花達が何と鮮かだったことか。今でも忘れられない。その年の七月頃だったか、J君のおばあ様が夏に強い花をと、松葉ぼたんを持って来て下さり、園庭のフェンスに添って十メートル程も植えて下さったのだ。初めはかなりの間隔を置いて植えられたものが、次々と増えて原色に近いさまざまな色の松葉ぼたんが、夏中、いや秋の中頃まで咲き続け、その間に子供達と砂の様に細くて黒いつやつやした種を取り続けたものだ。当時はこの辺も、殆んど畠と荒地だったので、道行く人達も足を止めて眺めて行ってくれた。このおばあ様はそれ以後も、お孫さんが卒園される迄、庭の草を取って下さったり何気なく掃除をして下さったりした。今はもう他界されたが、夏に松葉ぼたんを見ると、おばあ様のことを思い出すのだ。

季節はまちまちだが庭の一角から花を数え上げると、紅梅、水蓮、沈丁花、こぶし、木蓮、ぼけ、あじさい、ばら、ヒヤシンス、クロッカス、チューリップ、朝顔、ある年にはスイトピー、そして、ゆり、ベゴニヤ、マリーゴルド、サルビヤ、ひまわり、あざみ、ポリアンサス、すみれ、ゆすら梅、は

なみずきの白と赤、椿、さざんか、すもも、ぐみ、黄桜、八重桜、さるすべり、カンナ、桃、ハイビスカスの赤と黄、よい香りのライラックなどがある。冬には庭の片隅に造られた温室の中で、早春の花が咲き競う。というより狭い温室は数種類のくじゃくサボテンでうずまっている。もう一つ、丈も幅も大きくなり過ぎてこの温室に入れてあげられない程大鉢の、月下美人がある。七月中頃から九月頃まで、十五輪から二十輪の花を咲かせ、その姿と香りとを楽しませてくれる。寒い間も枯れない程度に、凍らない程度にして冬を耐えさせる。少しの日があれば窓辺に運び、夜の寒さにはガラスから少し離してやる。夏の夜に二十センチもの白い大輪が茎や葉をしならせて咲く姿は美事だ。夕涼みを兼ねて幾人もの園児や卒園生が、お父様やお母様と見に来て下さる。中学生になったある卒園生は、夏休みの宿題にと、咲き始めるところから数時間をカメラに納めて、観察記録を作ったりしてくれた。午後七時半頃から静かに、ふるえる様に咲けば、もう十時頃からはどことなく、いのちの下り坂で外側の葉を後方にそらせながら、三、四時間の短い花の生命を終っていくのだ。この月下美人も、葉を切り茎節をつめて葉ざしにして増やし、差し上げたりもしたので、もう何十鉢もが他の人々の手によって育てられている。この他にも、君子らん、ゴムの木、ハイビスカス、折り鶴らん、はかたからくさなども、株分けしたり、さし木をしたりで、花の子や孫が、いろいろな方達の家で数え切れない程咲き続けていてくれるはずだ。今年は何輪咲きました。とか、新しい葉が出て来ました、など。又、園庭のあの花はもう咲きましたか。と卒園児やその御父兄の折々のお便りに書いて下さったりすると、もう、うれしくて仕方がない。

毎年同じ時期に咲いてくれる花々。花との語らいが何よりも楽しみであり、花のことばが解る様な気がするのだ。子供達も幼い心できっと、花との語らいをしているに違いない。やがて、春の花々が咲き競い、はなみずきの美しい季節が訪れる。